無断転載・コピー・再配布等はご遠慮ください

万葉集をよむ（『万葉集』巻八）　二〇二四年四月二四日（水）

春の雑歌（1）（一四一八～一四二七番歌）

奈良県立万葉文化館　井上さやか

▼『万葉集』巻第八

・歌数　二四六首（長歌　六首／短歌　二三六首／旋頭歌　四首）
・部立　春　四七首（雑歌　三〇首／相聞　一七首）
　夏　四六首（雑歌　三三首／相聞　一三首）
　秋　一二五首（雑歌　九五首／相聞　三〇首）
　冬　二八首（雑歌　一九首／相聞　九首）
※四季分類は巻十にも（後世の勅撰集では普遍的な分類法に）
※『芸文類聚』の四季分類や『玉台新詠』の影響か
・作者や作歌年次を記す（巻十は作者未詳歌）
・巻頭に飛鳥・藤原時代の歌を載せるが奈良時代の歌が多数
・題詞や左注の書き方が不統一（資料の違いか時期の違いか不明）
・大伴坂上郎女が収集した歌に大伴家持が追加か（諸説あり）
・季節や雑歌／相聞の区分は便宜的で厳密ではない
・題詞ではなく歌の中の季節語彙によって分類される傾向
・巻三、四、六との関係が深い（同一の歌人や同一の場での作歌）
※重出歌（巻四・四八八、四八九／巻八・一六〇六、一六〇七）
※同日宴（巻六・一〇二四～二七／巻八・一五七四～八〇）
・季節語彙として花や鳥が頻出（花鳥を好む）
※中国の六朝・初唐詩に通じる傾向

無断転載・コピー・再配布等はご遠慮ください

▼巻頭歌

春の雑歌

志貴皇子の懽の御歌一首

石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも

（一四一八）

春雑歌

志貴皇子懽御歌一首

石激垂見之上乃左和良妣乃毛要出春尓成来鴨

岩の上をほとばしる滝のほとりのさ蕨が萌え出る春に、なったことだなあ。

・志貴皇子（芝基皇子／志紀皇子／施基皇子／志貴親王）

天智天皇の皇子。海上女王、湯原王、榎井王、春日皇子、光仁天皇の父。天武八（六七九）五月吉野の盟約に他の五皇子と加わる。天武天皇皇子の磯城皇子とは別人〈朱鳥元（六八六）八月に両者共に封二百戸を賜わっている〉。持統三（六八九）六月撰善言司（日本書紀）。霊亀二（七一六）・八月薨。宝亀元（七七〇）年春日宮御宇天皇と追尊、同十月に田原天皇と追尊（続日本紀）。

・「懽」ヨロコフ（類聚名義抄）。迎春の賀歌。四季分類の巻頭を飾る歌として位置づけ。

・「石激」垂水（滝）の枕詞。「伊波婆之流」（巻十五・三六一七）

・さわらび　ワラビ、ゼンマイ。「さ」は清浄、神聖の意の接頭語。

・「成来鴨」なりにけるかも。「うち上る佐保の川原の青柳は今は春べとなりにけるかも」（巻八・一四三三）など。

無断転載・コピー・再配布等はご遠慮ください

▼鏡王女

鏡王女の歌一首

神奈備の磐瀬の社の呼子鳥いたくな鳴きそあが恋増さる　（一四一九）

鏡王女歌一首

神奈備乃伊波瀬乃社之喚子鳥痛莫鳴吾戀益

神の天降る伊波瀬の森の呼子鳥よ、ひどく鳴くな。私の恋心がつのるから。

・鏡王女　鏡王の女。天武十二（六八三）年薨（日本書紀）。額田王の姉説（万葉集古義）、舒明天皇の皇女説（中島光風）など。

・カムナビ　神のいます所の意か。奈良県飛鳥（神岳）、三輪（三輪山）、龍田（a生駒郡斑鳩町神南の三室山、b同郡三郷町大字立野字西浦の神南備神社のある山）など。神座となる山や森をいう普通名詞でどこにでもありうる。万葉集中では飛鳥のカムナビが多い。

・「社」モリ（新撰字鏡）。

・磐瀬の社　龍田地方（奈良県生駒郡）にあった森。位置未詳。斑鳩町龍田の西南、同町稲葉車瀬にある杜、三郷町大字立野の大和川北岸の森か。他に飛鳥説など。

・呼子鳥　カッコウ、ツツドリ、ゴイサギなど諸説あるが未詳。

・な――そ　婉曲な禁止の表現。

・「春相聞」でもよい歌か

無断転載・コピー・再配布等はご遠慮ください

▼駿河采女

駿河采女の歌一首

沫雪かはだれに降ると見るまでに流らへ散るは何の花そも

（一四二〇）

駿河采女歌一首

沫雪香薄太礼尓零登見左右二流倍散波何物之花其毛

沫雪がまばらに降るのかと思えるほどに、大空を流れつつ散るのは、何の花であろう。

・駿河　国名。静岡県の中央部。伊豆半島を除く大井川以東の地。

・采女　地方の有力者から貢上され、天皇のそばに仕えた女官。天皇のキサキとなることもある。律令制では、郡司の姉妹や娘で容姿の優れた女性が貢進され、采女司により後宮十二司の水司・膳司に配属されて食膳奉仕などに従事した。

・「沫雪」アワユキ。泡状の雪。アハユキ（淡雪）とは異なる。

・はだれ　ばらけているさま。ハダレ（巻十・二三三七）、ハダラ（巻十・二三一八）、ホドロ（巻十・二三一八の一云）などとも。

・「左右」マデ。「諸手」（巻十・一九九七）、「二手」（巻三・二三八）、「左右手」（巻十・二三二七）など。マ（両手）は片の対。

・類想歌

妹が家に雪かも降ると見るまでにここだも紛ふ梅の花かも

（巻五・八四四）

無断転載・コピー・再配布等はご遠慮ください

▼尾張連

尾張連の歌二首〔名欠けたり〕

春山の咲きのををりに春菜摘む妹が白紐見らくし良しも

（一四二一）

尾張連歌二首　名闕

春山之開乃乎為里尓春菜採妹之白紐見九四与四門

春山の花が咲き満ちるところで若菜を摘むあの子の、白い紐を見るのはよいものだ。

うちなびく春来るらし山の際の遠き木末の咲き行く見れば

（一四二二）

打靡春来良之山際遠木末乃開往見者

しなやかになびく春が到来したらしい。山際の遠い梢に花が咲いていくのを見ると。

・尾張連　伝未詳。万葉集中にこの二首のみ。「連」は天武天皇十三（六八五）年制定の八種の姓（真人、朝臣、宿禰、忌寸、道師、臣、連、稲置）の第七。

・「乎為里」万葉考が「乎烏里」とみてヲヲリとよんだ。ヲヰリとよむ説も。両者は同根語（oとiの交替）で、たわむの意。

・春菜摘み　山野草の若菜摘み、春の野遊び。

・山が咲く　山の花が一斉に咲くこと（巻十・一八六一など）。

・「木末」コ（木）のウレ（末）の約。若い枝先。

・――らし――見れば　推定と実感を伴う感慨を詠む類型的表現。

無断転載・コピー・再配布等はご遠慮ください

▼阿倍広庭

中納言阿倍広庭卿の歌一首

去年の春い掘じて植ゑしわがやどの若木の梅は花咲きにけり　（一四二三）

中納言阿倍廣庭卿歌一首

去年春伊許自而殖之吾屋外之若樹梅者花咲尓家里

去年の春に掘り取って移し植えた私の家の若木の梅は、今年花を咲かせたことだ。

・中納言　大納言の補佐役として文武天皇代に再び設けられた令外の官。ここは中国の例に倣い極官（最高官職名）を記した。

・安倍朝臣広庭（安倍広庭卿／阿倍広庭卿）

御主人の子。阿倍とも記す。天平四（七三二）年・二月薨。歳七十四。『懐風藻』に詩二首が載る。晩年に中納言となった。

・「去年」コゾ（類聚名義抄）。「許序」（巻十八・四一一七）など。

・い掘じ　「い」は接頭語。「こず」は掘り取る意。

・やど　「屋前」「屋外」など。家のあるところの意。ここでは屋敷の庭を指す。『万葉集』に「やど」の花鳥を詠む歌多数。

・「梅」ウメは中国からの舶来植物。「烏梅」と表記してウメとよませた例も。貴族などの邸内に植えられ愛でられた。

※天平二（七三〇）年の梅花宴歌群（巻五・八一五～八四六）

詩歌に詠まれるのは通常は白梅。『楽府詩集』など。

無断転載・コピー・再配布等はご遠慮ください

▼山部赤人

山部宿祢赤人の歌四首

春の野にすみれ摘みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける

（一四二四）

山部宿祢赤人歌四首

春野尓須美礼採尓等来師吾曽野乎奈都可之美一夜宿二来

春の野にすみれを摘もうとして来た私は、野に魅せられて、一夜寝てしまったことだ。

・山部赤人　伝未詳。氏、姓、名の順に人名を記すのは低位。聖武天皇代の行幸従駕歌や旅先での自然詠で知られる。

・四首　『万葉集』に四首一組の歌は多い。一四二四と一四二五が入れ替わる写本が複数ある。

・「須美礼」スミレ。『倭名類聚抄』に「菫菜　須美礼」。「都保須美礼」（巻八・一四四四）とも。春菜摘みは植物の若い芽を摘む行事。

・なつかし　心身ともに引きつけられるような気持ち。

・寓意の有無　スミレ、一夜寝ること

・『古今和歌集』仮名序にもみえる。『源氏物語』に引き歌も。

あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいと恋ひめやも

（一四二五）

足比奇乃山桜花日並而如是開有者甚戀目夜裳

あしひきの山の桜の花が、何日も何日もこのように咲くのなら、どうしてひどく恋しく思うだろう。

無断転載・コピー・再配布等はご遠慮ください

・山桜花　『万葉集』中のサクラは現在のヤマザクラとみられる。

あしひきの山桜花一目だに君とし見てばあれ恋ひめやも

（巻十七・三九七〇　大伴家持）

わが背子（せこ）に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降れれば

（一四二六）

吾勢子尓令見常念之梅花其十方不所見雪乃零有者

いとしい人に見せようと思っていた梅の花は、どれとも見えない。雪が降ってしまったので。

・梅の花と雪

わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

（巻五・八二二）

明日（あす）よりは春菜（はるな）摘（つ）まむと標（し）めし野に昨日（きのふ）も今日（けふ）も雪は降りつつ

（一四二七）

従明日者春菜将採跡標之野尓昨日毛今日母雪波布利管

明日からは春の若菜を摘もうと印をした野だったのに、昨日も今日も雪が降りつづけて。

・雪は降りつつ

三島野に霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪は降りつつ

（巻十八・四〇七九　大伴池主）

※『万葉集』は原則として、奈良県立万葉文化館「万葉百科」https://manyo-hyakka.pref.nara.jp（二〇二四年四月二二日閲覧）に拠り、一部私に訓や現代語訳等を付した。